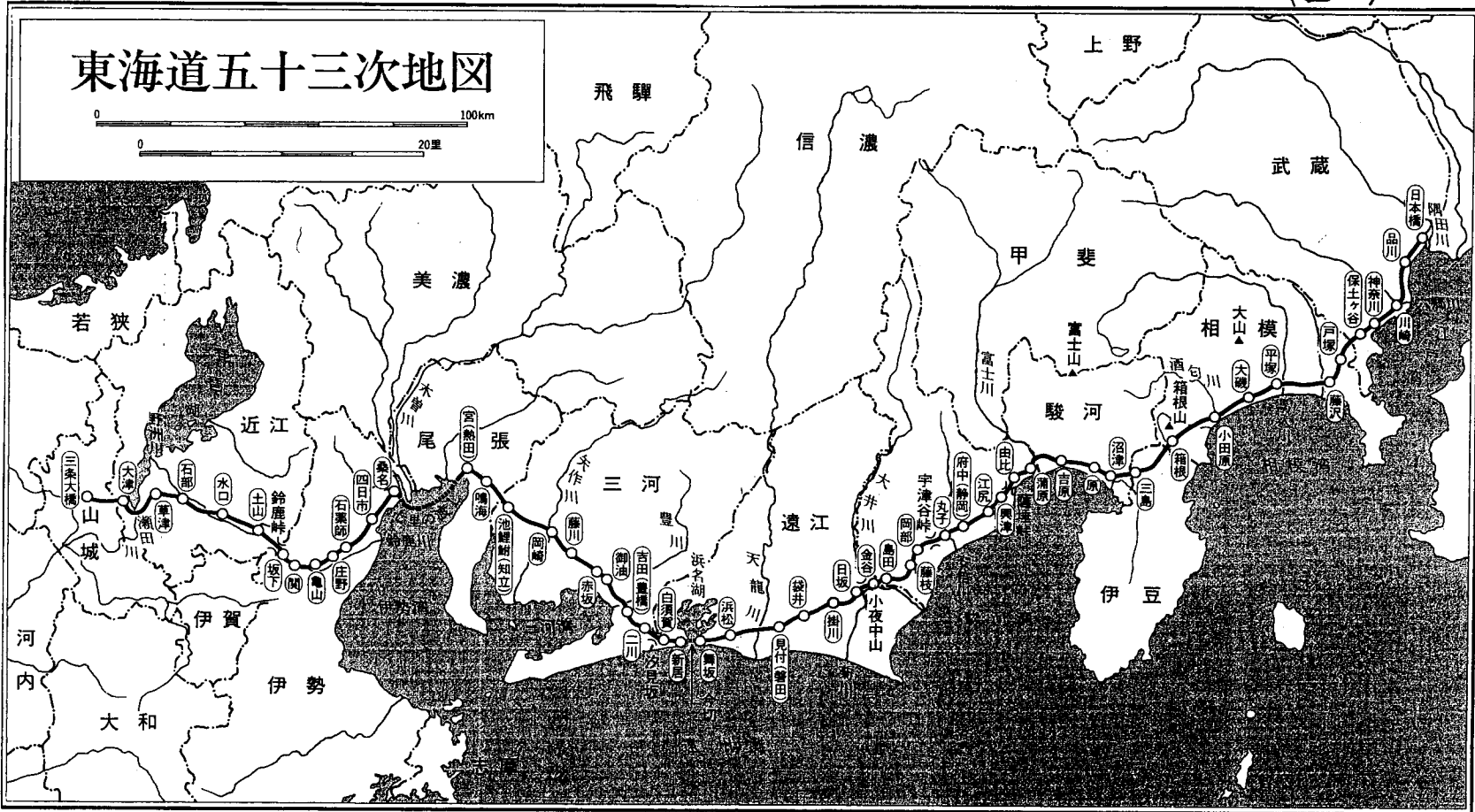


道中双六を読む〜東海道の名所・名物をめぐって〜

東京学芸大学 嶋中 道則

(図1)



(森川 昭若『東海道五十三次ハナヅカ』改訂版、三省堂)

記号一覧

A 東海道遊歴双六

B 道中記細見双六

C 東海駅路狂歌寿娛録

*各記号の次に画または見出し中の文字を記した。ただし、Cの狂歌は省略した。()
内は絵に描かれたものを示す。

1 日本橋

A (日本橋・江戸城・富士山)

B (擬宝珠・江戸城・富士山) 広重肉筆画「日本橋より富嶽遠望の図」に類似。

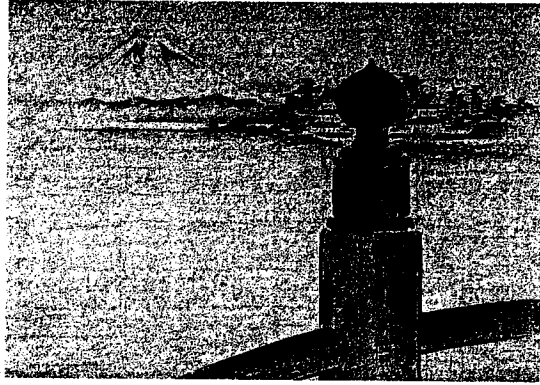
C (擬宝珠・江戸城・富士山)

・葱宝珠高欄、橋の長さ二十八間、江戸町中の中央にして、諸方の行程をこれより定む。

京師三条の橋より当橋まで行程すべて百二十四里半十五町、駅宿五十三次、これを東海道といふ。

・橋の上より見れば、北に浅草・東叡山見ゆ。南に富士の山峨々とそびえ、西の方
は御城なり。東には海づら近く、行きかふ舟も定かに見えわたれり。『江戸名所記』

(図2)

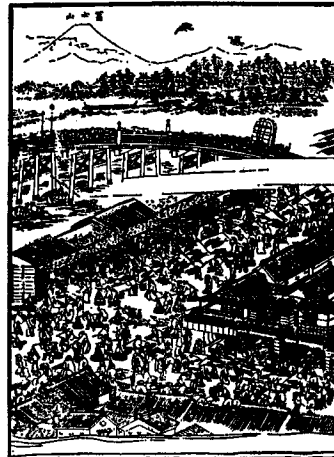


16 日本橋より富嶽遠望の図 歌川広重

(図録「日本橋絵巻」, 2006, 三井記念美術館)

日本橋

(図3)



『東海道名所図会』(『日本名所風俗図会17・諸国の巻』)
新刊書館、以下、同)

2 大磯 (神奈川県大磯町)

- A 鳴立沢 西行庵 (鳴と葦)
- B さかは川出水にて一日とうりう 酒匂川うちわたり (大磯の海の景・酒匂川川越し)
- C しぎたつ沢 (鳴立沢・鳴・雨)

・鳴立沢 昔、西行上人、東路行脚の時、このほとりの沢辺を通りたまふに、折から秋

の暮の物淋しきに、鳴の立ち去りてなほも寂寞たる風情を感じ詠みたまふを、新古今

に選ばれ三夕の名歌のその一首とす。 『東海道名所図会』

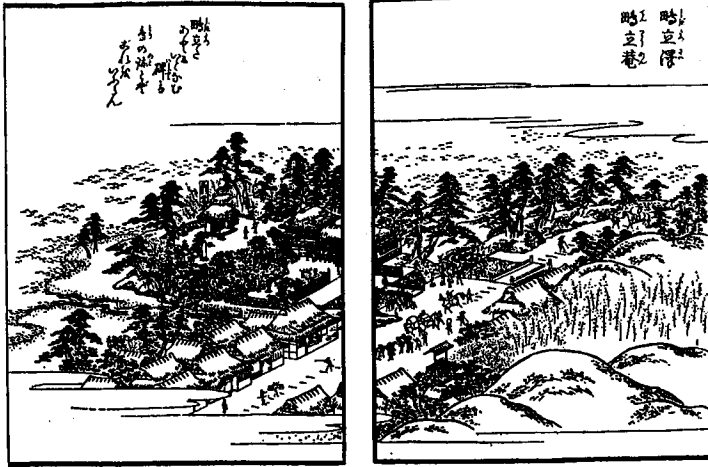
・心なき身にもあはれは知られけり 鳴立つ沢の秋の夕暮 西行 (新古今集)

・鳴立庵 小磯の路傍にあり。宝永年中、俳諧師三千風、この草庵を結んで、鳴立沢の古蹟をとどむ。 『東海道名所図会』

・雨↓虎が雨 (陰暦五月二十八日の雨。曾我十郎祐成の愛人虎御前が十郎の討死を悲しんで流す涙が雨になって降ると伝える)

鳴立沢・鳴立庵

(図4)



鳴立沢 鳴立庵 鳴立つたあとにいとなむ雨 (いしよみ) は鳥の涙とぞこれといふらん

(『東海道名所図会』)

(図5)



衣笠「東海道五拾三次之内 大磯」〈虎ヶ雨〉
(『東海道五拾三次之内 大磯』より転載、以下同)

3 小田原 (神奈川県小田原市)

A 名物 梅ほし いかのたつき (梅干・ういろう)

B (街道の景)

C いかのたつき 漬梅 (梅の枝・梅漬)

・小田原北条氏綱の時、京都西洞院錦小路外郎といふ者、この地に下り、家方透頂香を製して氏綱へ献ず。その由緒は、鎌倉建長寺の開山大覚禪師来朝の時供奉し、日本へ渡り、家方を弘む。氏綱これを靈薬とし、小田原に八ッ棟の居宅を賜はり、名物として世に聞こゆ。

・小田原、外郎、鯉の叩き、粕漬梅の火燃す挑灯

『東海道名所図会』
『東海道名物往来』

(図6)



小田原、外郎店



小田原外郎透頂香 (ういらうとうちんこう) は、大覚禪師来朝の時より日本に伝はり、北条氏綱ここに在城の時、八棟造の菓店と許して弘めさせける。三枝 (さみせん) のトクテン香のその香は平屋に聞こゆ風外郎

(東海道名所図会)

(図7)



352 街道の土産 (一九 諸国金草鞋)

(『江戸時代図説』14・東海道一 永野善房)

4 鞠子 (丸子とも。静岡県静岡市)

A 名物 とろろ汁 (擂鉢・擂粉木・井・膳)

B 名ぶつ とろろ汁 (山中茅屋の景)

C とろろ汁 (とろろ汁店・客と店の者)

・梅若菜まりこの宿のとろろ汁 芭蕉『猿蓑』

・『東海道中膝栗毛』とろろ汁店の夫婦喧嘩

(図8)



元重「東海道五拾三次之内 鞠子」〈名物茶店〉

(図9)



元重「東海道五拾三次之内 日坂」〈佐夜/中山〉

5 岡部 (静岡県岡部町)

A うつの山 名ぶつ 十だんご 名所 萬の細道 (十団子・茶釜・茶碗)

B うつの山 名ぶつ 十だんご (宇都谷峠)

C うつの山 (宇都の山)

うつの山にいたりて、わが入らむとする道は、いと暗う細きに、萬・かへでは茂り、もの心細く、すすろなるめを見ることと思ふに、修行者会ひたり。『伊勢物語』九段) 坂のあがり口に、茅屋数軒あり。家ごとに十団子を売る。その大きさ、あづきばかりにして、麻の緒につなぎ、いにしへは、十粒を一連にしけるゆえに、十団子といふならし。(中略) 樂阿弥、十団子を見てよめる

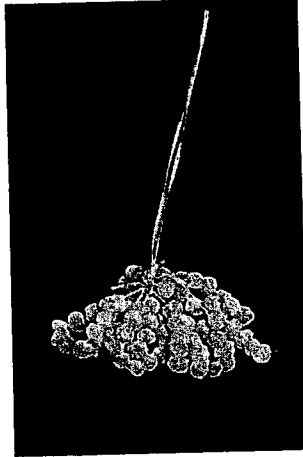
小粒なるうつの山べの十団子しかもかたくて歯にあはぬなり (『東海道名所記』)

・十団子も小粒になりぬ秋の風 許六 (『韻塞』)

・歌舞伎『萬紅葉宇都谷峠』(河竹黙阿弥)

現在の十団子

(図10)



(図11)



小泉屋の子育飴

(以上2点『東海道五十三次ハガタ』より)

6 日坂にっさか（新坂とも。静岡県掛川市）

- A わらび餅（茶店で餅を食う旅人）
 - B むげん山みゆる さよの中山 よなき石（無間山・夜泣石）
 - C 小夜の中山 よなき石（夜泣石を見る旅人）
- ・新坂は、わらびもち、名物なり。葛の粉にてつくり、豆の粉をまぶして、旅人にすすむるに、往来の人、ひだるさまぎれに、蕨餅なりと思ひて、つるに葛餅なりとは知らずかし。
『東海道名所記』

・年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり佐夜の中山 西行『新古今集』

・夜泣石よなきのいし 街道の真中にあり。

夜哭松よなきのまつ 夜泣石の東一町ばかり左側にあり。

妊婦塚はらみなんのつか 夜泣松の傍らにあり。

『東海道名所図会』

・夜泣石の伝説く日坂に住む妊婦が金谷に行く途中、盗賊に殺され、その霊が石にこもり夜な夜な泣く。その折生まれた子どもは飴で育てられ、成長の後、池田の宿で親の敵を討つたという伝説。『東海道名所記』以降、夜泣松のこととして各道中記にも載る。『東海道名所図会』によれば、右三箇所由来を記したものを印刷し、小夜新田の茶店で売っていたという。

・金谷かなや、菊川の飴あめと俱ともに佐夜さよの中山飴の餅は夜啼石のいしに非ず。新坂の蕨餅せきじりは雄鯨おとこじり山の赤きに似たり。
『東海道名物往来』

・無間むげんの山やま昔、この山に無間の鐘といふあり。この鐘を撞けば、現世にては無量の財宝を得るといへども、未来は無間地獄に墮落すといへり。
『東海道名所図会』

7 鳴海（愛知県名古屋古屋市）

- A 名物 有松ありまつしほり（有松しほり）
- B めいふつ ありまつしほり（有松の人家の景）
- C 有松しほり（有松しほり）

・名産有松絞り 鳴海より一里ばかり東にあり。細き木綿を風流に絞りて、紅藍くれあめに染めて商ふなり。この市店十余軒あり。旅行の人および諸国へ商ふ。
『東海道名所図会』

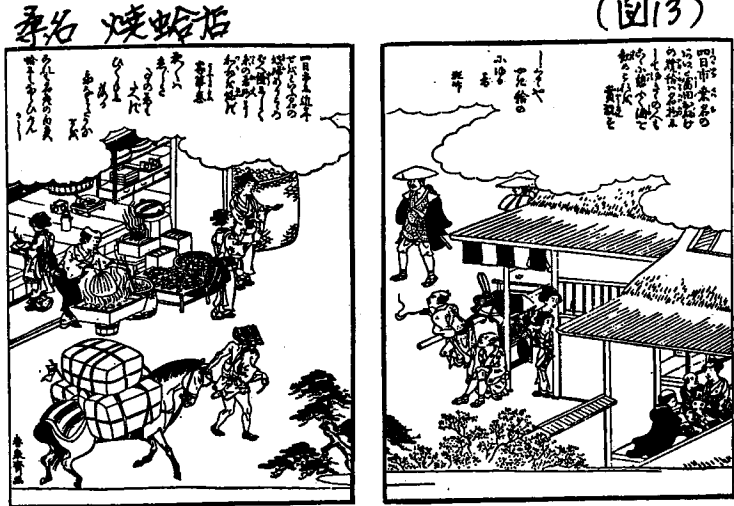
『東海道中膝栗毛』く將棋に熱中する有松絞り店の主人と値切ろうとする弥次郎兵衛との珍妙なやりとり

(図12)



広重「東海道五拾三次之内 鴨海」く名物有松絞り

(図13)



四日市・桑名のあひだ富田・おぶけの焼蛤は名物にして、ゆききの人もここに懸よて酒を勧めこれを賞玩ししぐるややき蛤のゆる春 夜竹 四日市に近年せをといふ名の故牌あり。ころばへ後にして、糸の首妙に和歌を詠ず 寄事恋(ことによるこひ) 夜々は悲しき事の目もたえずひく手に落つる我がなみだかな せを これも名産の白魚・蛤にもならひけんかし

(『東海道名所図会』)

8 桑名(三重県桑名市)

- A 名物 やきはまぐり(蛤)
- B (七里の渡し船着場・桑名城) 保永堂版「東海道五拾三次之内 桑名」
- C とみた 蛤(蛤)
- ・ここ(桑名)は、蛤の名物あり。『東海道名所記』

・名物焼蛤 東富田、おぶけ(小向) 両所の茶店に火鉢を軒端へ出し、松毬にて蛤を焙

り旅客を饗す。桑名の焼蛤とはこれなり。 『東海道名所図会』

・桑名につきたる悦びのあまり、名物の焼蛤に酒くみかはして… 『東海道中膝栗毛』

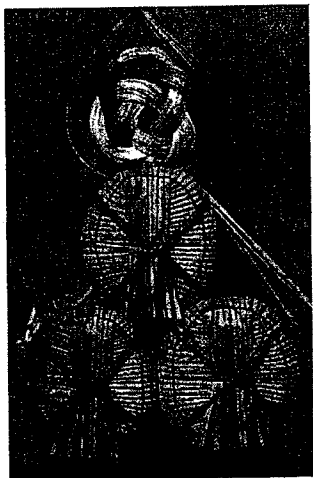
9 庄野(三重県鈴鹿市)

- A 名物 焼米俵入(焼米入り俵)
- B (白鳥塚あたりの景)
- C 白鳥塚(白鳥塚)

・この宿の名物は、俵の火米なり。その俵のなりは、大きき、握りこぶしほどなり。青き緒にて編みたる小俵なり。…家ごとに並べ置きて売りけり。〔東海道名所記〕

・白鳥塚く日本武尊の御陵と伝えられる塚。

焼米俵(庄野宿資料館蔵)



(図14)

〔東海道名所記〕庄野名物焼米の店。青い緒で編んだにぎりこぶしほどの小俵に入れて売る。



(以上2点、東海道五三次ハオダツクより)

10 石部 (滋賀県石部町)

A 目川村 なめしでんがく (田楽豆腐・急須・櫃・茶碗)

B (三上山)

C 女川 田楽 藤の棚 (藤の枝・菜飯・急須・田楽豆腐)

目川 菜飯田楽店 (図16)



目川 目川とは村の名なれど、今は名物の菜飯に田楽豆腐の名に因りて、何国(いづく)にも目川の店多し。互に買物の一環となるも、かれが全盛なるべし

(東海道名所図会)

11 草津 (滋賀県草津市)

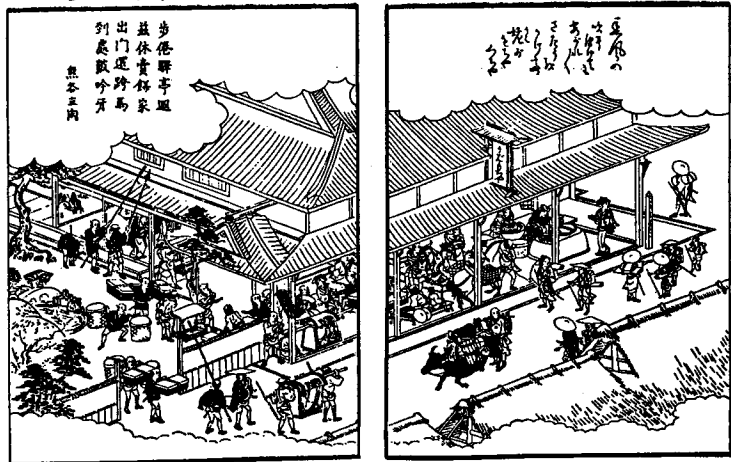
A 名物 姥が餅 竹のむち (姥が餅・竹の鞭)

B ふり留りになれば、近江の石山を一ツかぞへてゆくべし (瀬田の唐橋)

C 姥が餅 (姥が餅屋)

姥が餅屋

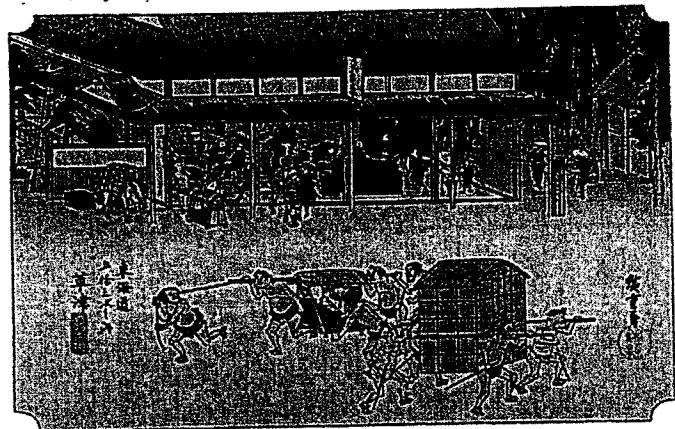
(図17)



寒風の吹くにつけてもあがれあがれさうを掛けて姥がもちやくちや 歩み借いて駅亭屋(とは)し/こ
こに休む餅を売る家/門を出づ遅時の馬/列る馬、餅屋牙す 餅谷立開

『東海道名所図会』

(図18)



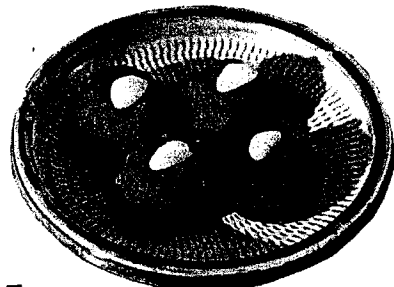
弘宝「東海道五十三次之内 草津」名物立場

・追分の北南の両かどの家は、これ隠れなき草津の姥が餅屋なり。 『東海道名所記』
 ・風戦ぐ草津の竹の鞭は、乳母が餅搗く小唄に做ひ、 『東海道名物往来』
 ・近江国の佐々木左京大夫義賢の子孫が滅ぼされた時、その遺児の養育費を稼ぐために、
 その乳母が店を設けて売り出したと伝えられる 『近江名所図会』。
 ・かわいいあん餅で伝説の乳母の乳房を思わせる白あんをポツンと乗せる。
 (森川昭『東海道五十三次ハンドブック』 『東海道名所図会』)

12 上り(京)

- A 上り 京 清水 音羽瀧 大内 (桜花爛漫の清水寺)
 一ッあまれば三條へかへる あとは右にしゅんす (準ず)
- B 上り 京都 三條大橋之図 御所
- C 京 上り 三條大橋

(図19)



うばがもち

(『東海道五十三次ハンドブック』による)